

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：37103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381228

研究課題名(和文) 戦後美術教育における人間像の変遷と美術教育実践の多様化

研究課題名(英文) Representations of humans beings and Educational Practice in Art Education: Its History and Contemporary Issues in Japan

研究代表者

谷口 幹也 (TANIGUCHI, Mikiya)

九州女子大学・人間科学部・教授

研究者番号：30335830

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、戦後美術教育における「人間像」の検証を通して「私」という存在そのものを肯定的に捉え、より良い存在への変容を促す美的次元の経験の問題が、最重要課題であるということを示した。また新たな美術教育原理と方法は、戦後美術教育の検証と継承、限界芸術に見る市井の人々の表現、ヒューマニズムに基づく芸術、表現の捉え直しと、人間形成に関わる美術機能の問題、現代の美術様式分化と美術教育理論の多様化の関係を整理し、これを秩序づける基礎論によって確立されると結論付けた。そして新たな時代の美術教育原理・方法の解明するにあたり、「遊びこむ」と「考える」を鍵概念とした美術教育を提案した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to consider how to grow the spirit of freedom in an art education in Japan. "Education through Art" proposed by Sir Herbert Read had a significant impact and was a starting point of the contemporary art education in Japan. However, its significance has become obscure today. In this study, we did text analysis of private art education movement in Japan after World War II, that is, in 1950s -1970s. Also, it clarified what should be improved in order to foster creative and democratic people. As a conclusion, we suggested the importance of "thinking" in the art education as a specific method to grow the spirit of freedom. It was located on the extension of "play" which is the center of the art education in Japan. The discussion has major implications for the art education in the world as well as in Japan.

研究分野：美術教育学

キーワード：戦後 人間像 美術教育 創美 自由

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、平成18～20年度科学研究費若手研究B「現代美術における「市民」による制作活動の教育的意義と美術科教育の今日的使命」(課題番号:18730543、研究代表:谷口幹也)において、市民と現代美術の関係、都市とアートとの関係性に関して分析調査を行なった。そこで、現代美術における「市民」による制作活動の教育的可能性を確認し、中学校、高等学校の美術科の教育活動において、「社会との関わり」「批判的思考に基づく制作活動」「協働、コミュニケーション関係性の創出」といった参加型美術作品の特性に基づく美術教育の内容、方法について言及した。本研究課題は、以上述べた研究成果を基盤とし研究をスタートした。本研究課題の研究開始当初の背景として、次期学習指導要領の改定がある。時代、社会状況が変化していくとき、美術教育の基盤とは何か、何が美術教育の営為・実践を支えているのかを問うことが今日より一層必要となっている。先行研究として、以下を把握し研究を準備した。石川毅『芸術教育学への道』、『総合教科「芸術」の教科課程教授法の研究』、山本正男『美術教育学への道』、中井正一『美学入門』等、戦中戦後を生きぬき、「人間」を直視した美学者、芸術学者の再評価が最重要な課題である。かつて柴田和豊は『メディア時代の美術教育』において、現代美術教育の射程と課題を明示し、その今日的意義の検証が必要である。美術教育学以外の諸学では、矢野智司は、「生成としての教育」を提言し、人間の生成、変容に基点とした教育学を構想している。また、社会学者・見田宗介は『社会学入門—人間と社会の未来』(2006)において「交響体」の概念を提示し公共の再構築への道を提言している。現代美術作家・白川昌生は『美術・マイノリティ・実践—もうひとつの公共圏を求めて』水声社(2005)等の著作においてアートプロジェクトが持つ美術教育上の課題を明示し、近代的芸術家像から技能的実践家へと通じる芸術家像=人間像の変遷を明らかにしている。

2. 研究の目的

本研究は、我が国の戦後美術教育が、どのような人間像を掲げ推進されてきたのかを検証することを通じて、新たな時代の美術教育の原理方法を追求するものである。研究対象は、第二次世界大戦後の我が国の民間美術教育運動から、今日の学校教育及び社会教育の場で展開される美術教育実践とする。そして日本各地で展開される美術館教育、ワークショップ、アートNPOによる地域振興、アートプロジェクトを美術教育実践の多様化と定義し、戦後美術教育の人間像に関する歴史的考察を基軸に、新たな時代の「公共的個人」「人間の尊厳」といった最重要のキーワードを軸にした美術教育の原理、方法を探求する。

3. 研究の方法

本研究課題の具体的な研究方法は以下の通りである。

(1)戦後美術教育における人間像の変遷分析
我が国の戦後美術教育を代表する「創造美術協会」「新しい画の会」の調査。戦後日本の美学者、山本正男、石川毅による美術教育学、芸術教育学構想の検証。柴田和豊論文の検証。

(2)美術教育実践の多様化に関する分析

日本各地のアートプロジェクト、アートNPOの調査研究。アートプロジェクト「WiCAN」に関する質的研究。

(3)戦後学校教育の原理・方法の分析

戦後日本の政治状況の検証。学習指導要領における人間像、社会像の変遷に関する検証。授業実践に関する情報収集と分析。美術教育の目標論をめぐる歴史的推移に関する検証。元東京学芸大学附属小金井中学校教諭・水野谷憲郎氏の聞き取り調査。

(4)海外美術教育実践との比較

グローバルな視点に立った教育、文化プログラムの調査研究。調査対象:オーストラリア/メルボルン市の小学校3箇所、メルボルン現代美術館、InSEA2014。アメリカ合衆国/MoMA、クィーズ美術館、USSEA2015。

人間の尊厳、戦後に注目した文化施設、芸術活動に関する調査。調査対象:ポーランド共和国/ポーランドユダヤ歴史博物館、アウシュビッツ・ビルケナウ博物館。ドイツ連邦共和国/ホロコースト記念博物館、ハンブルガー・バーンホーフ現代美術館。大韓民国/釜山ビエンナーレ。

(5)新たな時代の美術教育原理・方法の解明

大学、小学校教育現場の相互協力を基盤にし、研究者、教育実践者、アーティスト等とシンポジウムを開催し研究を推進。

4. 研究成果

(1)戦後美術教育における人間像の変遷分析

1945年、敗戦後の日本は、真空状態にあった。昨日までの確固たる価値体系が潰れた後を虚脱感が支配し、すべての活動は停滞する。今日の日本の美術教育を形づくる、最も大きな契機は何であったのか。それは、創造主義の美術教育、創美である。創美は、戦後の混沌とした社会状況の中、子どもたちの素朴な表現に希望の原理を見出し、子どもたちに自分自身の価値や意味、存在に出会うという掛け替えのない体験をもたらした。「体感する自由」これが、私が創美に見出す教育再生の原理である。創美に触発された教師たちは独自の研究と運動を行い、新しい画の会、造形センターといった後の民間美術教育運動を生み出す。創美の活動の中で私が注目するのは、特別な技能、経験を持たない普通の教師が美

術教育を担うべきものとして運動が展開された点である。

石川毅はその主著である『芸術教育学への道』において、「芸術教育における創作とは、子どもたちに芸術創作の体験をさせることではなく、彼らの固有な生と世界とを徹底して肯定すること、つまり、彼らの不条理を承認すること、云い換えれば世界性に与る喜びをできる限り持続させることから始まる」と述べている。そして美術教育を希望の原理として普遍化するためには、民主主義・自由主義がわが国の指導理念となった1945年という歴史的時間に係る記憶の重みを直視することだと語った。

本研究では、山本正男(1912-2007)の『美術教育学への道』、石川毅の『芸術教育学への道』の分析を通し「人間像の変遷」に関する検討を行い、美術することの主体的な活動と、教育という主体的な活動そのものの中に、同一普遍な論理構造をとらえ同一の主体的・内面的な論理構造において、美術と人間形成とを同時に展開する戦後美術教育の思想的源流の再評価した。柴田和豊退官記念論文集を発行し、柴田が行った戦後美術教育の検証、理論探求の発掘と再評価を行った。

(2) 美術教育実践の多様化に関する分析

〈美術〉における近代的芸術家像からプロジェクト型アートを組織する芸術家への展開に関する調査研究を千葉市で展開するWiCANにて行う。今日、作品を作るとはどういった問題をはらんでいるのか、また個人の表現がどう社会と接続されるのか、作品を契機に浮上する問いとメッセージをどう語り考えることができるのかをWiCAN 2013、WiCAN 2014、WiCAN 2015の事例をもと明らかにした。

(3) 戦後学校教育の原理・方法の分析

戦後日本の政治状況、学習指導要領における人間像、社会像の変遷に関する検証。教育界で重要視される「21世紀型学力」、経済界・産業界で重視される「クリエイティビティ」、日本の戦後美術教育が重視した「民主主義」「遊び」を総括する概念として「アートする力」を示した。元東京学芸大学附属小金井中学校教諭・水野谷憲郎氏のインタビューアーカイブを作成した。

(4) 海外美術教育実践との比較

戦後美術教育の研究において「戦争」の問題を避けることはできない。ポーランドユダヤ歴史博物館では、ユダヤ人一千年の歴史をプロジェクトマップ、タッチパネル等ICTを駆使した展示方法、実際触れ体験できる展示物、ホロコーストに関する客観的かつ鑑賞者の内省を促す展示内容等、科研研究課題に掲げた「戦後」「人間像」の文言を世界的観点から検証する具体的な知見を得、アウシュビッツ・ビルケナウ博物館では、ドイツが第二次世界大戦中に国家をあげて推進し

た人種差別的な抑圧政策により、最大級の惨劇が生まれたアウシュビッツ・ビルケナウの跡地が、当時のまま保存、維持されていた。そこで語られる言葉、歴史的物事存在の存在感、展示物を通じて得られる体験は、日本との比較において、美術教育学上、最重要な問題群をはらんでいることが明らかになった。

(5) 新たな時代の美術教育原理・方法の解明

ハーバート・リード (Herbert Read 1893-1968) が示した「*Education through Art*」(1943)は、日本においても大きな影響を及ぼし、今日の日本の美術教育の出発点となっている。しかし、今日の日本では、その精神は形骸化している。本研究グループはこのことを問題視した。なぜなら、戦争、大量殺戮の現実を直視し、その現実を乗り越えるために構想された美術教育の歴史、その精神を重視するからである。第2次大戦後の日本の復興、経済成長は世界史的観点から見ても特別なものである。高度な消費社会の実現は、消費による自己実現、消費による自由の謳歌を肯定し増長させる一方で、持たないものへの排除を止める手だてを持つに至っていない。子どもの生活世界は激変し、高度情報社会に取り込まれている。この現代の問題、劇的な変化に対峙し、日本の美術教育は変革を求められる一方で、その社会の要請に十分に答えられていない現状がある。

本研究では、戦後美術教育における「人間像」の検証を通して「私」という存在そのものを肯定的に捉え、より良い存在への変容を促す美的次元の経験の問題が、最重要課題であるということを明らかにした。また新たな美術教育原理と方法は、戦後美術教育の検証と継承、限界芸術に見る市井の人々の表現、ヒューマニズムに基づく芸術、表現の捉え直しと、人間形成に関わる美術機能の問題、現代の美術様式分化と美術教育理論の多様化の関係を整理し、これを秩序づけうる基礎論によって確立されると結論付けた。

そして本研究は、新たな時代の美術教育原理・方法の解明するにあたり、以下を提案した。

公教育とは何か、そして美術教育の使命とは何か。私たちは、その定義を以下のように考えている。「各人の〈自由〉および社会における〈自由の相互承認〉の、〈教養〉を通じた実質化」。つまり公教育は、すべての子どもに、〈自由〉に生きるための「力」を育むことを保障するものである。そして同時に、社会における〈自由の相互承認〉の土台となるべきものである。現代の公教育がその育成を保障すべき「学力」の本質、それは「学ぶ力」である。教育は、子どもたちに「学ぶ力」を育むことで、その後の長い人生において「自ら学び続ける」ことを可能にする、その土台を築く必要がある。日本の美術教育における「遊び」の概念、「造形遊び」は、「自由の根」を育む為の実践であり、「自ら学び続け

る力」を育むことを主眼とした教育活動である、と再定義することができる。

私たちは、「自由の根」育てる具体的な方法として「遊びこむ」と「考える」を鍵概念とした美術教育を提案する。しかし、本研究では、具体的な教育方法を確立するには至らなかった。そこで、今後、以下の5項目の研究フレームのもと研究を継続する。

- ① クリエイティビティの回復。
- ② < 視ること > とヴィジュアル・感性的コミュニケーションの回復。
- ③ メディアをつくる。
- ④ プロジェクトするものへ。
- ⑤ 視覚コミュニケーション形成変容の教育を含むプロセスを解明する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 相田隆司「美術教育における人間形成をめぐる一考察—戦後民間美術教育運動をめぐる1980年美育文化誌記事をきっかけにして」東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系 第67集, 査読無, pp. 55-66, (2015)
- ② 神野真吾「社会にプラクティカルに関わるアートに求められるもの」『SEA アイデア・マラソン2015ドキュメンテーション』査読無, pp. 25, (2015)
- ③ 相田隆司「図画工作科・美術科の教材づくりのための一考察—イメージ生成の経験を支援する方法を検討するための予備的考察—」『教材学研究』日本教材学会, 査読有, 第25巻, pp. 43-50, (2014)
- ④ 谷口幹也「危機に立ち向かう意志と身体—創美の今日的意味と可能性—」『美育文化』財団法人美育文化協会2014年1月号, 査読無, pp. 24-27, (2014)
- ⑤ 相田隆司「美術教育のいまと創造主義」『美育文化』財団法人美育文化協会2014年1月号, 査読無, pp. 20-23, (2014)
- ⑥ 神野真吾「サブシステム芸術とその外部へ変容するアートの社会的位置〜」『社会システム芸術とその変容』科学研究費補助金(基盤研究(A)(1))研究成果報告書, 査読無, pp. 126-134, (2014)
- ⑦ 相田隆司「教師が題材づくりに必要と考える力について—図画工作専科を対象とする質問紙調査の質的な検討—」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系』第65集, 査読無, pp. 44-51, (2013)
- ⑧ 相田隆司「美術教育の題材づくりに関する一考察—図画工作専科教員を対象とした題材づくりに関する質問紙調査を通して—」『美術教育学』美術科教育学会, 第34号, 査読有, pp. 1-14, (2013)
- ⑨ 神野真吾(他4名1番目)『芸術教育による感性に働きかけるESDの構築』科研報告書, 査読無, 全16ページ(2013)

[学会発表] (計10件)

- ① 谷口幹也「転換期日本の美術教育を構想するための基礎的考察—戦後美術教育とアートする力—」第38回美術科教育学会大阪大会(大阪成蹊大学)、2016年3月
- ② 谷口幹也、米谷 健+ジュリア、川端浩平、神野真吾、「“アートする力”を考える—転換期日本の美術教育を構想するために—」美術科教育学会現代(A/E)部会(CCAAアートプラザ)、2016年3月
- ③ 長田謙一、相田隆司、浅野恵治、大島賢一、神野真吾、立川泰史、谷口幹也「拡張された<美術/教育>の基本構造と可能性を考える—21世紀の美術教育のフレームを明らかにするために—」第37回美術科教育学会奈良大会(上越教育大学)、2015年3月
- ④ 谷口幹也、神野真吾、相田隆司、柴田和豊「“今日”の「芸術」と「教育」の共通構造を捉える—美術することの人間学と、美術教育学の課題—」美術科教育学会地区会in東京(CCAAアートプラザ)、2014年12月
- ⑤ Mikiya Taniguchi, Takashi Aida, Nobuhiko Fujihara, and Tokuyuki Nishimura. *Art Education to Cultivate a Base of the Spirit of Freedom (I): Its History and Contemporary Issues in Japan* 34th World Congress of the International Society for Education through Art (InSEA), Melbourne Australia, 2014.
- ⑥ Tokuyuki Nishimura, Nobuhiko Fujihara, Takashi Aida, and Mikiya Taniguchi. *Art Education to Cultivate a Base of the Spirit of Freedom (II): A Case Study of a Teaching Practice in an Elementary School* 34th World Congress of the International Society for Education through Art (InSEA), Melbourne Australia, 2014.
- ⑦ 神野真吾、谷口幹也「美術/教育において求められる創造性と人間像とは」第36

回美術科教育学会奈良大会（奈良教育大学）2014年3月

- ⑧ 谷口幹也, 西村德行「美術教育における「自由」を考える-理論探求の場から-」第36回美術科教育学会奈良大会(奈良教育大学)2014年3月
- ⑨ 西村德行, 谷口幹也「美術教育における「自由」を考える-授業実践の場から-」第36回美術科教育学会奈良大会(奈良教育大学)2014年3月
- ⑩ 谷口幹也、神野真吾、相田隆司「戦後美術教育における“人間”と、美術教育実践の多様化を考える」美術科教育学会現代(A/E)部会(千葉市美術館)2014年2月

[図書](計12件)

- ① 谷口幹也「転換期日本の美術教育を考える」『宮脇理先生米寿記念出版』BookWay-ブックウェイ(共著), 8頁担当(2016)
- ② 神野真吾『美術1』検定教科書, 藤澤英昭, 柴田和豊, 神野真吾ほか, 開隆堂出版株式会社(中学校教科書)(2015)
- ③ 神野真吾『美術2・3』検定教科書, 藤澤英昭, 柴田和豊, 神野真吾ほか, 開隆堂出版株式会社(中学校教科書)(2015)
- ④ 相田隆司「教科教育学シリーズ8 図工・美術科教育」一藝社(共著) pp. 51-65, pp. 94-107, (2015)
- ⑤ 神野真吾「一般化されうるアートの本質とは」(単)『5 designing Media Ecology』, 「5」編集室, pp. 85-92, (2015)
- ⑥ 谷口幹也「Study 1 子ども時代の学び: 子どもは暴力を抱えている」『現代アートの本当の学び方』フィルムアート社, pp. 52-57, (2014)
- ⑦ 谷口幹也「Study 3 精神を見る: 苦悩に触れる」『現代アートの本当の見方』フィルムアート社, pp. 152-157, (2014)
- ⑧ 神野真吾「美術が分かるとはどうか」『美術教育の題材開発』武蔵野美術大学出版局, pp. 56-60, (2014)
- ⑨ 神野真吾「美術という「文化」を考える」『美術教育の題材開発』武蔵野美術大学出版局, pp. 123-126, (2014)
- ⑩ 神野真吾「西洋の美術文化と日本の伝統文化」『美術教育の題材開発』武蔵野美術大学出版局, pp. 154-158, (2014)

⑪ 神野真吾「美術史を美術教育に活かすには」『美術教育の題材開発』武蔵野美術大学出版局, pp. 372-375, (2014)

⑫ 谷口幹也「高学年「造形遊び」授業づくりの醍醐味」『学習公開・初等教育研修会2013年度版』筑波大学附属小学校一般社団法人初等教育研究会, pp. 194-195, (2014)

[その他]

ホームページ等

<http://d.hatena.ne.jp/zone1969jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷口 幹也 (TANIGUCHI, Mikiya)
九州女子大学・人間科学部・教授
研究者番号: 30335830

(2) 研究分担者

相田 隆司 (AIDA, Takashi)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号: 20302903

神野 真吾 (JINNO, Shingo)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号: 90431733

(3) 研究協力者

穴澤 秀隆 (ANAZAWA, Hidetaka)
西村 德行 (NISHIMURA, Tokuyuki)
藤原 伸彦 (FUJIHARA, Nobuhiko)
柴田 和豊 (SHIBATA, Kazutoyo)
長田 謙一 (NAGATA, kennichi)
川端 浩平 (KAWABATA, Kouhei)